

環境は将来の子どもたちのもの

石川県金沢市 NPO法人みんなの畑の会





石川県金沢市の四十万地区は、市の中心部から南に6kmほど、約50年前から開発された住宅地で、住宅の間にある水田には青々とした稲が茂り、路地の先には里山が目に入る自然豊かな環境だ。「四十万」という珍しい地名は「阿弥陀如来が百済国からこの地にたどり着いた距離が四十万里だった」といういわれや「よるず沢山収穫できる土地」に由来するとされている。

NPO法人みんなの畑の会（代表理事・西田敏明さん）は、近隣で耕作放棄された田畑を活用して2017年3月に市民農園「みんなの畑」15区画を開園。現在では四十万地区6か所で146区画（2022年7月現在）まで広がっている。さらに、荒廃した里山や竹林の整備、体験事業、住民のための委託販売所の運営などに取り組み、子どもから高齢者まで幅広い世代が絶え間なく集い、地域に賑わいの場が生まれている。

7月31日、同会が運営する「みんなのお店」の特設テントで、子どもたちによる「夏休み販売体験会」が行われた。地元四十万小学校の子どもたちが社会勉強を兼ねて、NPO法人みんなの畑の会の支援者から提供された陶器などを販売する。

「おすすめはありますか？」購入を迷うお客さんに「管置き3個で100円はどうですか？」と子どもスタッフが声をかけると「安いね〜」とお買い上げ。初めての販売体験は「お客さんが楽しそうに見えた」と手ごたえをつかんだ様子。

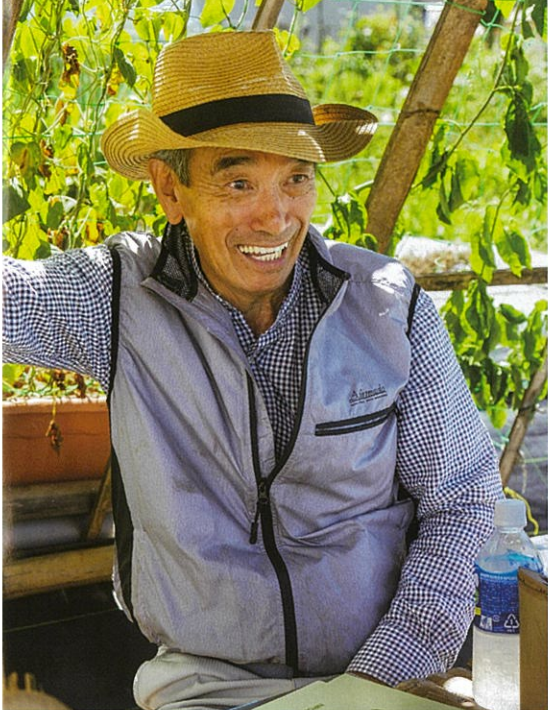
「みんなのお店」は、市民農園「みんなの畑」に隣接した農機具小屋を改装して開設した、地域のボランティアの方が運営する委託販売のお店だ。毎週土日の午前中、この地域で栽培された新鮮野菜や果物、花、山菜、趣味のクラフト作品などが店頭に並び店は賑わう。「自分で作った野菜を持ち寄り、誰かが喜んで買ってくれる」そんな地域の交流の場所になっている。

店の販売ボランティアに参加している男性は、他県から四十万地区に移住し、家庭菜園に興味があったことから、市民農園の看板を見て連絡したところ、初日から西田さんに四十万地区を取り巻く里山の現状を案内してもらったそうだ。「当初は自分でも想像しなかったけど、地域の環境に深く関わるようになった」という。

西田さんの案内で四十万地区にある里山に上がる。住宅街から徒歩圏内の低山だが、奥に進むと思いのほか木が生い茂り、自然と人間の境界線の印象を受ける。

四十万地区の農地の地権者のほとんどは、こうした後背地の里山の持ち主でもあったという。しかし、高齢化や後継者不足により里山が放置され、竹林が荒廃するようになった。戦前にはタケノコの缶詰工場があり、本来では手入れをすれば美味しいタケノコが収穫できる土壌だが、地域の資源が十分活用されていない。

そこで、竹林の整備伐採と散策路づくりなどを行い、2017年からはシイタケ・ナメコのホダ木オーナー制度を始めた。現在では約390名がオーナーになり、多くのボランティアの方が里山整備に参加。さらに桜やモミジの植樹を行いツリーハウスも作るなど、誰もが安全安心に集える「みんなの森」づくりも進めている。



いしかわエコデザイン賞2021【サ・ビズ領域】 Ishikawa Ecodesign Award 2021

地域交流を楽しみ 次世代に継ぎたい
農業用ハウス「竹ドーム」

●高齢化と労働力不足で放棄された竹林を伐採し、竹を資源として活用し、雪・風・雹に強く、耐久性を有し、鳥獣被害対策も兼ねた農業用ハウス「竹ドーム」を開発。竹リサイクルを推進し、自然環境にやさしいです。
●既設する林班地を複数に拡張したり、野営の場所を設けたりして、地域住民や子供たち、ボランティア等が楽しく利用しながら、新たな自然の広がりや学びの場となるように取り組んでいます。
●里山地域における全国民議の課題解決に貢献していきたいと考えています。

審査委員コメント
里山地域の資源や竹や草類から自然素材を駆使し、竹を農業用ハウスの原料として活用する手法、地元産品が盛り込まれている。豊かな自然環境を次世代に継ぎたいという姿勢が、雪や風や雹被害から多目的に活用できる農業用ハウスの開発に活用できる環境に配慮している点が、今後の活動の糧が与えられていると期待したい。

NPOみんなの畑の会
921-8132
川島金沢町しじま1丁目10-7
TEL: 090-1314-0441
URL: http://www.minnanohatake1996.amebaownd.com
mail: minnanohatake.nishida@gmail.com

いしかわエコデザイン賞2021【サ・ビズ領域】 Ishikawa Ecodesign Award 2021



また、伐採した竹を廃棄せず資源として有効活用する取り組みも進めている。中でも「竹ドーム」は、冬の風の風雪にも負けない竹の特性を活かした農業用ハウスとして全国各地から注目を集め、製作マニュアルも作成し普及活動に取り組む。竹林整備によりできた緩衝帯では、近年増加している獣害対策について、大学や高専、民間企業と連携して、獣害を追い払うロボットの共同研究などを行っている。

市民農園に始まった活動は、里山整備、竹を活かした産業の創出、鳥獣被害対策まで数珠つなぎで活動が広がっている。様々な活動の担い手はどうして引き寄せられてくるのだろうか。

西田さんは、「例えばビニールハウスが雪で潰れたら、助成金に頼るばかりではなく自分たちで研究開発して、他の人にも一緒にやろうと持ち掛けてみる。まずは実際に動いてみると『環境を守りたい、自然を守りたい、子どもを守りたい』そんな思いを持つ人が、どこかでみんなつながってくる」と話す。

「大きなイベントをみんなで一緒にやるのではなく、誰かと誰かで少しずつ分け合いながら、楽しみながら、毎日途切れないように何かを続けていく。ここで農業や里山の自然環境を体験した子どもたちが将来成長して大人になり、自分の子どもたちに大切さを伝えていく。そうすれば四十万の自然はもっと豊かになる」と西田さんは次世代に活動を託し、将来の子どもたちに豊かな自然環境をつないでいくことを目標にしている。

【連絡先】
NPO法人みんなの畑の会(代表:西田敏明さん)
メール:minnanohatake.nishida@gmail.com

